

**[A年]復活日（イースター）（2021年4月4日）****【旧約聖書日課】エゼキエル書36章16～28節**

16主の言葉がわたしに臨んだ。17「人の子よ、イスラエルの家は自分の土地に住んでいたとき、それを自分の歩みと行いによって汚した。その歩みは、わたしの前で生理中の女の汚れのようであった。18それゆえ、わたしは憤りを彼らの上に注いだ。彼らが地の上に血を流し、偶像によってそれを汚したからである。19わたしは彼らを国々の中に散らし、諸国に追いやり、その歩みと行いに応じて裁いた。20彼らはその行く先の国々に行き、わが聖なる名を汚した。事実、人々は彼らについて、『これは主の民だ、彼らは自分の土地から追われて来たのだ』と言った。21そこでわたしは、イスラエルの家とその行った先の国々で汚したわが聖なる名を惜しんだ。

22それゆえ、イスラエルの家に言いなさい。主なる神はこう言われる。イスラエルの家よ、わたしはお前たちのためではなく、お前たちが行った先の国々で汚したわが聖なる名のために行く。23わたしは、お前たちが国々で汚したため、彼らの間で汚されたわが大いなる名を聖なるものとする。わたしが彼らの目の前で、お前たちを通して聖なるものとされる時、諸国民は、わたしが主であることを知るようになる、と主なる神は言われる。24わたしはお前たちを国々の間から取り、すべての地から集め、お前たちの土地に導き入れる。

25わたしが清い水をお前たちの上に振りかけるとき、お前たちは清められる。わたしはお前たちを、すべての汚れとすべての偶像から清める。26わたしはお前たちに新しい心を与え、お前たちの中に新しい霊を置く。わたしはお前たちの体から石の心を取り除き、肉の心を与える。27また、わたしの霊をお前たちの中に置き、わたしの掟に従って歩ませ、わたしの裁きを守り行わせる。28お前たちは、わたしが先祖に与えた地に住むようになる。お前たちはわたしの民となりわたしはお前たちの神となる。

**【使徒書日課】ローマの信徒への手紙6章3～11節**

3それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。4わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりまし

た。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。5もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。6わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。7死んだ者は、罪から解放されています。8わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。9そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。10キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。11このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。

**【福音書日課】マタイによる福音書28章1～10節**

1さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行った。2すると、大きな地震が起こった。主の天使が天から降って近寄り、石をわきへ転がし、その上に座ったのである。3その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かった。4番兵たちは、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。5天使は婦人たちに言った。「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、6あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。7それから、急いで行って弟子たちにこう告げなさい。『あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。』確かに、あなたがたに伝えました。」8婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。9すると、イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。10イエスは言われた。「恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる。」

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## エゼキエル書36章16～28節

16主の言葉が私に臨んだ。17「人の子よ、イスラエルの家は自分の土地に住んでいたとき、その歩みと行いによってこれを汚した。彼らの歩みは私の前に、月経中の女の汚れのようであった。18そこで私は、彼らが地の上に注いだ血のゆえに、わが憤りを彼らに注いだ。彼らは偶像によってこの地を汚した。19私は彼らを諸国民の中に散らし、彼らは国々に追い散らされた。私は彼らをその歩みと行いに応じて裁いた。20彼らは諸国民のところにいき、そこでわが聖なる名を汚した。人々は彼らについて、『これは主の民だ。しかし彼らは主の地から去らなければならなかった』と言った。21そこで私は、イスラエルの家が行った先の諸国民の間で汚したわが聖なる名を惜しんだ。

22それゆえ、イスラエルの家に言いなさい。主なる神はこう言われる。イスラエルの家よ、私が行くのはあなたがたのためではなく、あなたがたが行った先の諸国民の中で汚した私の聖なる名のためである。23私は、あなたがたが諸国民の中で汚したために、汚されてしまった私の大なる名を聖なるものとする。私が彼らの目の前で、あなたがたの内に私が聖なる者であることを示すとき、諸国民は私が主であることを知るようになる——主なる神の仰せ。24私は諸国民の中からあなたがたを連れ出し、全地から集め、あなたがたの土地に導き入れる。25私があなたがたの上に清い水を振りかけると、あなたがたは清められる。私はあなたがたを、すべての汚れとすべての偶像から清める。26あなたがたに新しい心を与え、あなたがたの内に新しい霊を授ける。あなたがたの肉体から石の心を取り除き、肉の心を与える。27私の霊をあなたがたの内に授け、私の掟に従って歩ませ、私の法を守り行わせる。28あなたがたは、私があなたがたの先祖に与えた地に住む。あなたがたは私の民となり、私はあなたがたの神となる。

## ローマの信徒への手紙6章3～11節

3それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにあずかる洗礼〔バプテスマ〕を受けた私たちは皆、キリストの死にあずかる洗礼を受けたのです。4私たちは、洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかる者となりました。

それは、キリストが父の栄光によって死者の中から復活させられたように、私たちも新しい命に生きるため〔直訳→歩むため〕です。5私たちがキリストの死と同じ状態になったとすれば、復活についても同じ状態になるでしょう。6私たちの内の古い人がキリストと共に十字架につけられたのは、罪の体が無力にされて、私たちがもはや罪の奴隷にならないためであるということ、私たちは知っています。7死んだ者は罪から解放されているからです。8私たちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。9そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。10キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。11このように、あなたがたも自分は罪に対して死んだ者であり、神に対してキリスト・イエスにあって生きている者だと考えなさい。

## マタイによる福音書28章1～10節

1さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行った。2すると、大きな地震が起こった。主の天使が天から降って近寄り、石を転がして、その上に座ったからである。3その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かった。4見張りの者たちは、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。5天使は女たちに言った。「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、6あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。7それから、急いで行って弟子たちにこう告げなさい。『あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。』あなたがたにこれを伝えます。」8女たちは、恐れながらも大喜びで、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。9すると、イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われたので、女たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。10イエスは言われた。「恐れることはない。行って、きょうだいたちにガリラヤへ行くように告げなさい。そこで私に会えるだろう。」

**黙想のためのノート****次主日聖書日課について**

・4月4日「復活日」の日課主題は「キリストの復活」。

・移動祝日として祝われる「復活日」の日付は、東ローマ帝国ガレリウス帝の寛容令(311年)および西ローマ帝国コンスタンティヌス帝のミラノ勅令(313年)により公認されたキリスト教会が、325年に皇帝により招集されたニカイア公会議で決定した手順に基づいて定められてきた。ただし、当時の公式暦はユリウス暦に基づいていたため、西方教会がグレゴリウス暦に改暦した後も東方教会はユリウス暦に従って「復活日」を定めており、これによる東西教会の日付のズレが生じている。なお、グレゴリウス暦への改暦は、16世紀にローマ・カトリック教会が対抗宗教改革(プロテスタント改革運動に対抗して、ローマ教会が教義や制度の統一・統制を目的に実施した改革)の一環として実施されたため、東方正教会領域では採用されなかったが(世俗で使用されるようになったのは20世紀以降)、実用上優れていたためプロテスタント領域では18世紀までに広く採用されるようになった(最も遅いのは1752年の英国と翌1753年のスウェーデン)。しかし、元来、「復活日」の出来事は、初代教会において、ユダヤ教の「過越祭」と時期だけでなく神学的意義も結びついて伝承されたものであり、「過越祭」の七週後(50日目)に祝う「七週祭(ギリシア語表現では五旬祭)」が「聖霊降臨」の出来事の起こったときとして位置づけられたのも、偶然ではない。すなわち、「キリストの(十字架と)復活」や「聖霊降臨」など一連のキリスト教会における記念は、基本的に、ユダヤ教の伝統(旧約聖書)の再解釈(新しい解釈)として位置づけられるものである。

・「復活日」から始まる「復活祭」は、狭義には翌主日まで、広義には「聖霊降臨日」まで続く。一方、毎週の「主日」自体が当初から「復活の記念」を含む。

・「キリストの復活」に関連する初期教会の伝承(「福音書」等編纂以前の口頭伝承)は、二つの原伝承が組み合わされたものである。すなわち、復活された主イエスが弟子たちの前に現れたという「復活顕現伝承」と、死んで葬られたはずの主イエスの遺体が墓から失われたという「空の墓伝承」である。使徒パウロがIコリント15章で触れているように、初代教会にとってより重要であったのは「復活顕現伝承」であり、遺体の行方を問題にする(あるいは、復活の仕方を問題にする)「空の墓伝承」には二義的な意義しか認められていなかったと考えられる。「空の墓伝承」がおもに女性の証言に基づくものであったことも、二義的な扱いをされた理由だったかもしれない。しかし、「福音書」のように出来事を順序立てて物語っていくことが求められるようになるに従って、「主イエスの死と葬り」と「弟子たちへの復活顕現」の間を結ぶ「空の墓」の出来事にも関心が向けられるようになったのだろう。

**旧約日課(エゼキエル 36章より)**

・「エゼキエル書」は、旧約正典「後の預言者」の第三巻に位置づけられ、前6世紀のバビロン捕囚下で預言活動をした祭司・預言者エゼキエルの「預言の書」である。バビロニア帝国ネブカドネザル王(在位=前605~562年頃)によるユダの人びとのバビロン捕囚は、南王国ユダの都エルサレムが陥落し王国が滅亡する(前587年頃)以前から始まり、前597年から前578年頃まで断続的に続いたと考えられる。エゼキエルは、まだ若い時期に初期のバビロン捕囚で祭司であった父らと共にバビロンに移住し、同地で祭司の任職を受け、それと同時に「預言」活動を始めたと思われる(同書1章)。つまり、エゼキエルは、イザヤやエレミヤのような他の「預言者」らのように王宮仕えの祭司として「預言」(王への助言や国家儀礼での宣旨など)活動をしたわけではない。おそらく、彼は、捕囚の民の中の元王侯・貴族らに「預言」することを求められたのだろう。一方で、すでにエレミヤの時代には一定の持続的な集団として活動していたと考えられる「預言者の伝統継承集団」にも関わることで、バビロン捕囚後のユダヤ宗教共同体の形成(エルサレム神殿再建と正典編纂を柱として進められた)において「エゼキエルの預言の書」は正典の中に位置づけられることになったのだろうと考えられる。

・本書は、バビロン捕囚と南王国ユダの滅亡という歴史事象を踏まえて、まずユダおよび諸国に向けた神の審判が告げられ(4~33章)、次いでイスラエルの復興および新しい神殿の幻が告げられる(34~48章)。日課箇所は、一連のイスラエル復興預言の中で霊的刷新が告げられる一部。続く37章では、いわゆる「枯れた骨の復活の幻」が告げられており、「復活」と「神の霊」に関する旧約預言の一つの見解を示している。

**使徒書日課(ローマ 6章より)**

・「ローマの信徒への手紙」は、使徒パウロが未訪のローマ教会を訪問する計画をあらかじめ伝え、自分のエスパニア伝道計画への協力を求めるために記された書簡。異邦人伝道の意義を共有してもらうことを主眼としており、ユダヤ人の歴史的特異性を認めながら、異邦人とユダヤ人に共通の救いの原理を示すための論述をしている。ここでパウロの示す救いとは、基本的に、真の意味で「神の民」共同体に加えられること(回復されること)である。そこで、歴史的に外形上「神の民」と認識されるユダヤ人の問題を避けて通れないが、異邦人とユダヤ人の差異を乗り越えさせるのが「イエス・キリスト」の存在と位置づけられる。それを端的に示すのが、日課箇所でも取り上げられる「キリスト・イエスと結ばれるために洗礼を受けた」という事実で、これによって、ただ一人「キリスト」の「死と復活の命」にあずかる者としてすべての者が一つの共同体(「Iコリント書」等の表現を用いれば、一つの「キリストの体」。Iコリ12章参照)に一つの方途で加えられる。

・パウロが日課箇所を示す「洗礼」論は、おそらく、パウロ独自のものではなく、初代教会で広く共有されていたものである。すなわち、各福音書で必ず、主イエスが宣教活動の初めに洗礼者ヨハネから洗礼を受けられたことを伝え、しかも、授洗者ヨハネが「わたしの後から来る方は…聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる」(マタイ3:11)等と告げていたとした上で、各福音書は、主イエスご自身の活動や発言の中に「洗礼」に関する言及があったことをさまざまに伝えている。また、パウロ書簡はじめいずれの新約文書でも、弟子たちの教会で「洗礼」の営みが新しくメンバーに加わる者の最初のしるしとして位置づけられてきたことは、疑問を持ちようのない大前提とされている。

### 福音書日課(マタイ28章より)

- ・日課箇所は、「マタイ福音書」が伝える「復活」の出来事の初めの部分で、「空の墓伝承」に「復活顕現伝承」が接続されている。「マタイ」は、この後に、独自の「復活顕現伝承」を続けているが、日課箇所までの内容は、概ね他の福音書が伝えるものと類似している。ただし、「マルコ」は「空の墓伝承」を伝えるが、「復活顕現伝承」を描いていない(現在正典出版に含まれる「マルコ」16:9以下は、明らかに後代の付加である)。
- ・四福音書の中で「空の墓伝承」と「復活顕現伝承」を明確に組み合わせているのは、「マタイ」のみである。ただし、「マタイ」がここで「空の墓伝承」と組み合わせているのは「婦人たちへの復活顕現伝承」である。「婦人たちへの復活顕現伝承」は、「ヨハネ」が伝える「マグダラのマリアへの復活顕現伝承」と同源の伝承によるものと考えられるが、「ヨハネ」のように「マグダラのマリア」一人に特化したものとしてではなく、「婦人たち」に対するものとして伝えている。一方、「ルカ」は、「婦人たちへの復活顕現」は描かない。
- ・「マタイ」に特異的な点は次のとおり。
- ・まず、墓の入口の石が取り除けられたことに関連して、「地震(セイスモス)」の発生を伝えている。「マタイ」は、主イエスの十字架上で死の場面でも「地震」を伝えているが(27:51および27:54)、27:51は同根の動詞「セイオー」で表現されている。また、日課箇所中4節「震え上がり」も「セイオー」である。「マタイ」は、「湖の出来事」を伝える場面でも、「マルコ」および「ルカ」が「突風(ライラプス)」を用いるところで「セイスモス(嵐)」を用いており、この語を多用している。おそらく、「マタイ」は、この語の「揺れ騒ぐ」というニュアンスを象徴的に用いているのだろう。
- ・「番兵」の登場。この「番兵」は27:54「見張りをしていた人たち」と同じで、「守る」の意の語の人称化(19:17、23:3、27:36、28:20)。一方、27:65、66、28:11の「番兵」は、ローマ軍の兵士の身分を指す語。
- ・「婦人たちへの復活顕現」も、「マタイ」に特異的な逸話である。9節「おはよう(カイレテ)」は、原義「喜べ」で、5:12「喜びなさい」と同じ表現で挨拶の慣用語。

### 来週の誕生日(4月4日~10日)

#### 主日礼拝の讃美歌から

- ・21-325番「キリスト・イエスは」(=I148「すくいのみしは」)は、原詞が14世紀のたラテン語聖歌で、1708年発行英語讃美歌集『ダビデの堅琴』で英訳詞がこの曲と組み合わせられてから、代表的な英語イースター讃美歌として歌われてきた。
- ・21-331番「主はよみがえられた」は、テゼ共同体の讃美で、フランスの作曲家ベルティエが作曲。テゼ共同体は、改革派牧師の子としてスイスに生まれ自ら牧師となったロジェ・シュッツ(ブラザー・ロジェ)が、1940年にフランス・テゼで超教派の「和解の共同体」を始め、ユダヤ人難民や孤児を匿ったことから始まった祈りの共同体(観想修道会に近い)。ベルティエは、パリ・聖イグナチオ教会オルガニストとしても活動する傍ら、1975年以降、テゼ共同体のために多くの讃美を作曲した。
- ・21-524番「われらみ名により」は、20世紀初頭の英国で指導的な立場にあった讃美歌作家ディアマー作詞の聖餐讃美歌。曲は、20世紀前半に米国で活躍した音楽家フリーデルがこの詞のために作曲。

#### 21-325「キリスト・イエスは」

#### Surrexit Christus hodie

##### (English Translation)

Christ is risen today / For the comfort of all people. / He endured death yesterday / He suffered instead of Man. / Women to the tomb / Bring spices as gifts, / Search for the Lord Jesus / Who is Savior of Men. / See a white angel Announces joy: / Women oh trembling, / Into Galilee proceed, / To disciples they declare, / That the king of glory is risen. / Peter next and the others / Appears to the apostles. / In this paschal joy / Bless the Lord. / Glory to you, Lord, / Who raised out of death. / Praise holy Trinity / We give thanks to God.

#### 21-331「主はよみがえられた」

#### Surrexit Dominus vere

Surrexit Dominus vere. / Alleluia, Alleluia,  
Surrexit Christus hodie. / Alleluia, Alleluia.

#### 21-524「われらみ名により」

#### Draw Us in the Spirit's Tether

1. Draw us in the Spirit's tether, / For when humbly in Thy name, / Two or three are met together / Thou are in the midst of them; / Alleluia! Alleluia! / Touch we now Thy garment's hem.
2. As the brethren used to gather / In the name of Christ to sup, / Then with thanks to God the Father / Break the bread and bless the cup, / Alleluia! Alleluia! / So knit Thou our friendship up.
3. All our meals and all our living / Make as sacraments of Thee, / That by caring, helping, giving / We may true disciples be. / Alleluia! Alleluia! / We will serve Thee faithfully.